資生堂

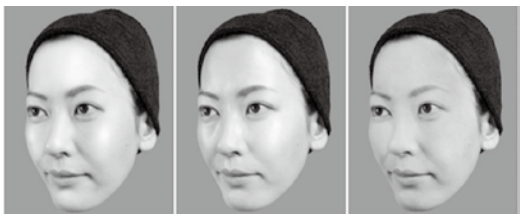
顔のつやは好印象を与えることを科学的に実証

資生堂は、国立研究開発法人情報通信研究機構（ＮＩＣＴ）との共同研究により、顔のつやが相手に対して魅力的で好印象を与えることを科学的に証明した。さらに今回、顔につやがある場合には、全くない場合と比較して見た目の印象から想起される年齢が３歳程度若く見られることもわかった。

これまでは経験的に、顔のつやは健やかな肌を表す光沢の状態としてポジティブな印象を他者に与えると考えられてきたが、科学的には十分な実証がなされていなかった。

今回の研究知見は、相手に好印象を与える肌のつやをもたらす感性価値の高いスキンケアやファンデーションの開発に応用可能であり、実際の対面場面はもちろん、モニターやスマートフォンなどの画面を通じたバーチャルなコミュニケーションにおいても、顔に適度なつやがあることでより健やかで魅力的な顔の印象を与えることが可能になる。

コロナ禍で在宅時間が増加し、スキンケアやメークアップの重要性が再認識される中、今回の知見を生かすことにより、様々な場面での対面コミュニケーションにおいて、つやによって相手に対する好印象を高めることができる、感性価値の高いスキンケアやファンデーションの製品設計につなげていく。



光沢の違い（右から「マット」「テカリ」「つや」）

顔のつや

光反射だけでなく、反射光の性質も重要

資生堂は、これまで科学的に実証することが難しかった主観的な知覚体験である顔のつやが与える情緒的な印象の感性価値について、今回、ＮＩＣＴと連携し、これまでに蓄積した感性・心理研究技術の手法や、同社の強みである心理物理学的研究手法を活かして検証した。

一般的につやのある肌は、「肌表面の鏡面反射に加え、内部からの拡散的な光の反射がある光沢」というように光学的な定義がなされ、同じ光沢感を表すテカリとは異なったポジティブな印象を与えると経験的に捉えられてきた。

そこで、「つやのある肌」（鏡面反射と拡散反射を組み合わせた光沢の乗った肌）、「テカリのある肌」（鏡面反射が多い肌の特徴を強調した光沢の乗った肌）、「マットな肌」（光沢を取り除いた肌）への印象を客観的に評価するために、各光沢条件を再現した同じ女性の顔画像に対して、見た目から受ける計10項目の印象を、30代～40代後半の計160名の女性に回答してもらい、得られた回答について、顔の光沢ごとに見た目から感じる印象や年齢について解析を行った。

その結果、「マット」や「テカリ」より「つや」のある方がポジティブな印象に捉えられることがわかった。なお、感性評価に関わる7つの印象項目全てにおいてこの傾向が顕著に認められたほか、見た目から推定される年齢について「つや」のある条件が3歳程度若く見えることがわかった。

今回の結果から、顔につやを想定して光の反射を付与した画像が最も他者へ好印象を与え、テカリの印象評価とは明らかに異なっていることが判明した。つまり、健やかな光沢状態を再現するためには、「肌が光を反射するだけでなく、反射する光の性質も重要であることを表している」（同社）という。

花王

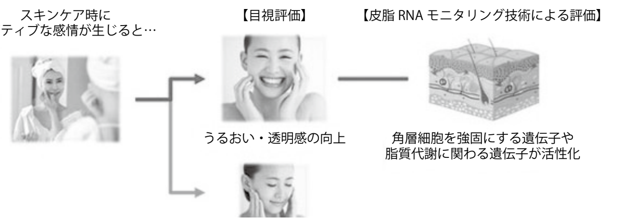
スキンケア時の幸福・満足感で肌内部の遺伝子発現が変化

花王は、「肌は心の鏡」といわれるように、肌と心のつながりは古くから知られていることから、この関係性を科学的に検証したところ、スキンケアを行ったときに生じる幸福・満足などのポジティブな感情は、「うるおい」や「透明感」といった肌の質感を向上させ、美しい肌へと導く可能性があることを突き止めた。

これまでの研究で同社は、クリームを肌に塗るなど、スキンケアをしたときにポジティブな感情がより生じた人は、そうではない人と比べて、「うるおい」や「透明感」などの肌の質感が向上することを解明していた。

そこで今回は、ポジティブな感情により肌の「うるおい」や「透明感」が向上した人を、独自開発の脂取りフィルムで皮脂をぬぐうだけで、簡単に多くの遺伝子発現の変化（ＲＮＡ量）を把握することができる「皮脂ＲＮＡモニタリング技術」を用いて解析した。その結果、「うるおい」や「透明感」が向上した人では、保湿に重要な角層細胞を強固にする遺伝子やバリア機能に欠かせない脂質代謝に関わる遺伝子が活性化していることがわかった。

つまり、スキンケア時にポジティブな感情が生じることで肌内部の遺伝子発現が変化することが確認できた今回の研究成果により、美しい肌を目指す上では、スキンケアを楽しむことの重要性がより明確に示されたといえる。今後、毎日行うスキンケアに、感触や香りなど楽しめる要素を取り入れることを推奨していく。


スキンケア時に
ポジティブな感情が生じると…
【目視評価】
【皮脂 RNA モニタリング技術による評価】
うるおい・透明感の向上
角層細胞を強固にする遺伝子や
脂質代謝に関わる遺伝子が活性化

独自技術による遺伝子レベルでの肌内部の評価

私の Ｈ＆Ｂ 日記

コラムの最適解とは

「コラムが書けない」。締切当日、真っ白なワードの前でひとり途方に暮れる。翌週発行の各取材記事を入稿し、最後に残るのが手つかずのコラムなのだ。

コラムの執筆には、時間が掛かる。テーマ選定からロジックの構成、結論の伝え方など迷いは尽きない。硬すぎるテーマは避けたいが、日記のごとく冗長な文章は掲載に値しない。私的な感情の吐露もまた役割を満たさないだろう。一体何が正解なのか。

そんな折、朝日新聞で社説等を担当された稲垣えみ子著のエッセイ「アフロ記者が記者として書いてきたこと。退職したからこそ書けたこと」を読んだ。彼女の文章は、節電生活など新聞らしからぬ身近なテーマと赤裸々な心情描写が人気を集めていた。

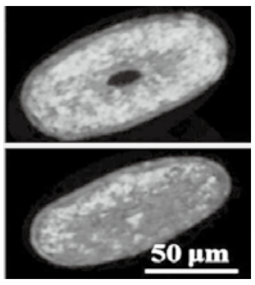
本書では当時を、コラムの内容に悩みながら「世の中のことであっても『だれかのこと』でなく『自分のこと』として、せめて泣きたくなるような実感をつづらねば相手にしてもらえないと追い詰められた気持ちで書いていた」と語る。

そして現代を「景気も社会も行き詰る中で、全体が生き残るために個はどこまでも後回しにされ、誰もが置いていかれないよう、切り捨てられないようビクビクしながら生きている」と俯瞰。その上で「今求められるものは『立派な見解』でも『正しい意見』でもない、ふつうの弱い人間同士が共感し励ましあえる場なのではないか。人々の『わかりあいたい』という思いの切実さ」は「私たちが思う以上にずっと切迫しているのかもしれない」と示唆する。

ハッとした。振り返れば「面白かった」と感想をいただけるのは、私的なテーマを血の出るような実感で書いた内容だった。身近な出来事をフックに読者を同じ電車に乗せ、各々に自分の景色を見せられる文章こそ、わかり合いたい気持ちに寄り添えるのかもしれない。

そんな気付きを得ながら締切に間に合わない焦りが勝り、結局今日もコラムが書けない。（高）

花　王『くせ毛』を美しく活かす技術を開発



曲がり方が大きい部位(下)では、2種類のコルテックス細胞が偏って分布している

花王は、これまで悩みと捉えられがちだった「くせ毛」に対して、自分らしく活かしたいとポジティブに考える人が増えてきているトレンドを踏まえ、その本質を研究し、自分のくせ毛を好きになれるような技術の開発を進めている。

くせ毛は、曲がり方が1本1本違っていることで起こる現象であるため、くせ毛の曲がり方を揃えることができれば、美しいツヤのあるウェーブをつくり出すことができるという。

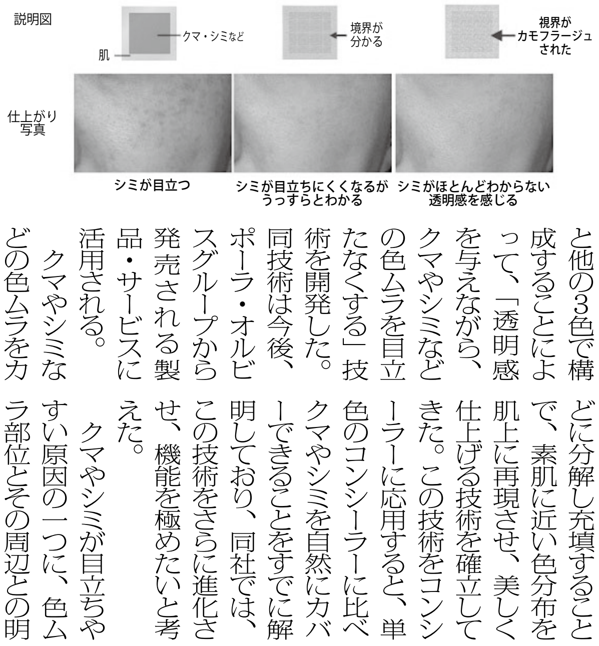
髪の毛の内部には、2種類の細胞があり、同社では研究結果から、髪の毛の曲がり方は、その2種類の細胞の分布と関係していることを突き止めた。

「2－ナフタレンスルホン酸ナトリウム」という基剤の水溶液にくせ毛をひたすと、髪の内部に偏って存在する赤色の細胞に基剤が集中的に作用して、曲がり方が大きい部位ほど、くせ毛が伸びてくる結果、くせ毛の曲がり方が均一になることを確認。髪の内部から、くせ毛を美しく揃えることに成功した。

この技術は、髪を外から固めて整えるのではなく、髪の内部に作用して曲がり方を揃えるため、自然で美しい仕上がりになる。この技術を応用して、自分のくせ毛をもっと好きになってもらえるような商品を開発していく。

ポーラ

「白」のチカラを活かし多色コンシーラー技術を進化



ポーラ化成工業は、複数の色で構成するベースメーク品の技術を進化させ、コンシーラーを白色と他の3色で構成することによって、「透明感を与えながら、クマやシミなどの色ムラを目立たなくする」技術を開発した。同技術は今後、ポーラ・オルビスグループから発売される製品・サービスに活用される。

クマやシミなどの色ムラをカバーするためには、一般的に単色のコンシーラーが用いられるが、素肌はもともと一色ではなく、複雑に色が分布しているため、単色コンシーラーでカバー力を高めると素肌本来の色分布が失われてしまい不自然に仕上がる課題があった。

同社では、ベースメーク料の色を黄、赤、緑などに分解し充填することで、素肌に近い色分布を肌上に再現させ、美しく仕上げる技術を確立してきた。この技術をコンシーラーに応用すると、単色のコンシーラーに比べクマやシミを自然にカバーできることをすでに解明しており、同社では、この技術をさらに進化させ、機能を極めたいと考えた。

クマやシミが目立ちやすい原因の一つに、色ムラ部位とその周辺との明るさの違いがくっきりしていることがあることから、色みの分布だけでなく明るさの分布にも適度にばらつきを出せば、明るさの違う境界線まで自然にカモフラージュできるのではないかと考えた。そこで、「黄」「赤」「緑」に明るい「白」を加えた4色コンシーラーを開発した。

白が適度に他の色と重なることで、よりゆるやかで自然な色分布にするとの仮説のもと、肌に塗り、仕上がりをテストした結果、3色コンシーラーに比べ、クマやシミがよりきれいにカバーされ、素肌とよくなじむことが実証された。さらに白を独立させたことで発光するような透明感を与えることにも成功した。

同社では、今後もベースメークの革新を目指して技術を進化させていく。